

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

(1) 造形活動

1. 活動のテーマ

＜テーマ＞

「にじむ」ってなんだろう？

＜テーマの設定理由＞

本園では造形講師を招き、保育活動の中で定期的に造形活動を行っている。今年度は「にじむってなんだろう」をテーマに、水と絵の具の関係から生まれる色の変化や広がりに着目し、子どもたちが素材に触れながら探究できる活動を展開した。

水を含んだ紙に絵の具を垂らすと、色がゆっくりと広がったり、異なる色が混ざり合ったりする。こうした変化は子どもたちにとって予想外の発見となり、「どうして広がるのだろう」「どのくらい水を使うとよいのだろう」といった疑問や興味につながる。

そこで、子ども自身が試したり工夫したりしながら表現できるよう、素材や活動の場を工夫し、にじみの現象を楽しめる環境を整えた。また年長児の活動をきっかけに、年中児・年少児にも興味が広がるよう、完成した作品を保育室の近くに飾ったり、自由遊びの時間に取り組めるコーナーを設けたりすることで、学年を越えて活動が広がるようにした。

年少は、年中・年長での造形活動につながるよう、絵の具・クレヨンなどの素材に親しむことを目標とした。

2. 活動スケジュール

4月～7月	(年長) ・屋上で大きな紙を濡らし青い絵の具をにじませる。 ・コーヒーフィルターをにじませて風鈴を作る (年中) ・年長児の作品を隣の部屋に飾ることで興味を持つ姿が見られた。 ・自由遊びの時間ににじみの活動ができるコーナーを設け、子どもが自ら取り組めるようにした。
9月～12月	お買い物ごっこ(造形展)の看板制作で、にじみの表現を取り入れた看板を作る。
1月～3月	(年中・年長)劇で使用する壁面を大きな紙に制作する。

3. 探究活動の実践

＜活動の内容＞

4月～7月	年長	屋上で大きな紙を濡らし、青い絵の具を垂らして色が広がる様子を楽しんだ。「川みたいに流れてる」「雨みたい」と色の広がりを見て感じたことを言葉にする姿が見られた。コーヒーフィルターに水性ペンで描き、水を垂らして色がにじむ様子を楽しむ。絵の具だけではなくアイテムを変えて変化を楽しんだ。完成した作品を風鈴として飾り、にじみの模様を生活の中で楽しんだ。
	年中	年長児の作品を隣の部屋に飾ることで興味を持つ姿が見られた。自由遊びの時間ににじみの活動ができるコーナーを設け、子どもが自ら取り組めるようにした。
9月～12月	年長	お買い物ごっこ(造形展)の看板制作で、にじみの表現を取り入れた活動を小集団で行った。色の広がりを楽しむだけでなく、小集団に保育者が

		加わって活動を行うことによって「この色とこの色にしたらかいい」「ここは青にしよう」など、色の組合せを考えながらデザインとして表現する姿が見られた。
1月～3月	年長	劇で使用する壁面を大きな紙に制作した。これまでの経験から「水を入れすぎると紙が破れる」「少しずつ水をつけるときれいに広がる」など、水の量を調整する姿が見られた。大きな紙での制作では「ここ押さえておくね」「もう少し水少なくしよう」と子ども同士で声を掛け合いながら協力して制作する姿が見られた。



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

活動を通して、子どもたちは絵の具と水の関係に興味を持ち、色が広がったり混ざったりする様子を楽しみながら表現活動に取り組む姿が見られた。当初は偶然生まれる色の変化を楽しむ姿が中心であったが、活動を重ねる中で「水を多くすると広がる」「色を重ねると違う色になる」といった気づきが生まれ、子ども自身が水の量や色の組み合わせを考えながら表現する姿へと変化していった。また、大きな紙での制作や小集団での活動を取り入れることで、友達と協力しながら表現を楽しむ姿も見られた。

年中児においても、年長児の作品を身近に飾ることで興味を持ち、自由遊びの時間に自らコーナーに足を運び「どうなるかな」と試しながらにじみを楽しむ姿が見られた。保育者にとっても、子どもたちの気づきや発見に寄り添いながら環境を整えることで、子どもの主体的な探究活動を支える保育のあり方について学びを深める機会となった。

(2) ホッケーあそび

1. 活動のテーマ

<テーマ>

ホッケーあそび パスしてシュート！人とつながる

<テーマの設定理由>

年中、年長は友達との関わりが広がり始める時期であり、同じ目的に向かって協力する経験を通して、主体的に考え行動する力が育つと考えた。スティックやボールを使ったホッケー遊びを取り入れ、身体を動かす楽しさを感じながら、「どうしたらゴールできるか」「どうしたらチームで協力できるか」などを子ども自身が考え、試し、工夫する活動を設定した。また、保育者も子どもの姿を観察しながら活動を共に探究し、どのような環境や関わりが子どもの主体的な学びにつながるのかを考えながら実践を進めた。

2. 活動スケジュール

4月～5月	スティックやボールに慣れる遊び
6月～7月	シュートや簡単なゲーム遊び

9月～10月	チームでの協力を意識した活動
11月～12月	作戦を考えるゲーム遊び
1月～3月	活動の振り返りと遊びの発展

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

①シュート遊び 年中・年長

シュート活動では、子どもを10人ほどのグループに分けて順番に取り組んだ。楽しく活動するためにどんなルールが必要か、小グループの話し合いを設け、シュートを終えた後は友達とスティックでタッチをしてから保育者にパスを渡すルールが生まれた。名前を呼ばれた子が次に取り組む形にして子ども同士が自ら順番を守り、ハイタッチをすることで友達と一緒に活動する楽しさを感じられるようにした。

②サーキット遊び 年中(平均台、コーン、ホッケーゴール、ボール、スティック)

4～5人の少人数グループでサーキットを行った。障害物を置き、「どうしたらみんなで乗り越えられるか」を子どもたち同士で考える時間を設け、チームで順番を決めて取り組むように促した。「順番に行こう」「ここを持ってあげる」などの声が子ども同士から生まれ、協力しながら取り組む姿が見られた。最後には全員がゴールにシュートを打てるように準備した。

③陣取り玉入れ 年中・年長

小集団でチームを作り、名前を呼び合いながらボールを集める活動を行った。スティックを使いボールを相手の陣地に入れる。陣取り玉入れを行う前に作戦会議をする時間をとった。保育者も一緒に参加し話し合いの仕方、相手の意見の受け入れ方を手本として見せた。「〇〇ちゃんこっち!」「まだあるよ」など、友達に声をかけながら活動する姿が見られ、自然にコミュニケーションが広がっていった。

④しっぽ取りゲーム 年中(小さいフラフープ、オーガンジーの布)

コーチや保育者がしっぽをつけ、子どもたちはスティックを持って追いかけるゲームを行った。4～5人のチームを作り、活動前に作戦タイムを設けたことで、「こっちから行こう」「囲もう」など、子どもたち同士で考えを出し合う姿が見られ、子どもたちの主体的な活動へとつながっていった。



⑤パス遊び 年長

2人組になり相手の名前を読んでからパスを出すルールを作った。相手を見ながら力加減や距離を考えて届くように意識パスを遊びを行った。



⑥ゲーム 年長・年中

年長は全員がボールに触らないとゴールできないというルールを作りパスを出してつなげるように設定した。年中は保育者やコーチを相手に小集団の友達の名前を呼びながらゴールできるようにした。



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

活動を通して、子どもたちは友達と関わりながら体を動かす楽しさを感じ、自分たちで考えたり作戦を立てたりする姿が見られるようになった。特に少人数のグループ活動を取り入れることで、子ども一人ひとりが意見を出しやすくなり、友達と協力して課題に取り組む姿が多く見られた。また、保育者も子どもの気付きや関わりを丁寧に観察しながら、活動の進め方や環境設定を見直すことで、子どもの主体性を引き出す保育についての理解を深めることができた。今後も子どもの興味や発想を大切にしながら、共に探究する姿勢を持って活動を展開していきたい。